

僕に何故か執着してくる謎の転校生はある日、突然豹変してしまいました

彼との出会いは十七歳の夏だった。

冬の夜空に輝く星のような人、これが僕が彼を初めて見た印象だ。

息が苦しくなるほど退屈で変わりのない日常が続いていた。学校でも家でも酷くもないが優しくもないそんな嫌がらせを受ける続ける僕にとってとはとても息苦しくてまるで酸素の薄い日々。そんな毎日が彼がクラスに転入して来た事で突然終わりを告げることになる。

ある朝、突然の転校生の知らせを担任の口から耳にするとクラスの生徒達がざわめき立つ。そんな中ガラガラと教室の扉が開く音が鳴ると同時にクラスはしんと静まった。

そこにはこの世のものとは思えないほどの美しい彼がいた。

肩に掛かるか掛からないかというほどの少し伸びた髪が、開けっ

ばなしの教室窓から流れる夏の香りがする風に当てられたその髪は太陽の日差しが当たる度にまるで夜空の中の銀河のようにキラキラと白く輝いていた。

日焼けをしていない肌は冬に降る雪のように白くて、そこに飾られた2つの瞳は吸い込まれそうなほどに美しく、澄んだ宝石のように皆目を奪われた。

：触れたら壊れてしまいそうなほどに儂く、恐ろしいほど美しい人は現実で見たことない。

「：すごく綺麗」

はつとした。自分の口から出たものだど気付いて慌てて手で口を押さえたが幸い、誰しもが彼の美貌に囚われているようで周りには僕の声なんか聞こえていないようだ。

一瞬女子かと思った。：が、彼の着ているものは男子生徒のもの

だった。ならば、『彼』で合っているのだろう。

教壇に立つ担任の横まで来るとその美しい転校生はキヨロキヨロとクラスの生徒達を見渡している。誰かを探している様子だった。彼のその何気ない行為ですらクラスの奴を色めき立てる。

「目合った！やばい、美形……」

「はっ……こっちみた……？」

「ああ……っ♡あの美しく鋭い眼差しで俺の眼球を貫いて欲しい……はあっ♡」

「……どうしよう、男なのにどきどきしちゃったんだけど」

少しおかしいやつ中にも居た気がするが、目が合っただけでこの

有り様だ。

：あんな奴が来てしまったらこのクラスはどうなるんだろう。僕  
のこの退屈な学校での日々を遠くからでも変えてくれるだろうか。  
顔がいい奴が良くも悪くも人間関係に影響を及ぼすことは知って  
いた。

恋慕、妬み、嫉妬、執着。

それらの感情は人を大きく狂わせてしまう。顔だけはいい美形な  
んて今までよく見てきたがここまでの美貌を備えた者なんていな  
った。そんな彼はどんな風に変えてしまうのか。

：意味の無い期待だとわかつている。でもそんな期待をせずには  
いられないほど今の現象に退屈し、絶望している僕にとって彼は希  
望の光だった。それともその逆か…。

そんなまだありもしない少し先のことを考えながら、まあ自分に

は関係ないかと思考を止めた。

「どうかしたか？」

困惑気味の担任の声がかきこえる。

そんな様子を前の席に座っている奴の肩越しに彼を見ていた。あんな見てくれのいい奴とこんな地味で暗い僕が関わることはないだろう。自分には関係ないと窓際の一番外ろで身を縮み込ませていた体を少し伸ばし窓の外を眺める。

：が、窓の外に自分の天敵を見つけて吐き気がしたので転校生へと再び視線を戻すと次は転校生が僕の方に目を向けていた。

そして僕の姿をその目に映し込むとその美しい瞳は大きく見開かれる。そしてにつこりと美しく微笑んだ。

え、僕に笑った：のか？

そう思った瞬間、クラスメイトの黄色い悲鳴に現実に戻された。

「きゃー♡こっち向いて笑ったあ…」

「気のせいよ！はあ、微笑んだ顔も美しい…」

「はあうつ…♡ボタン」

なんか一人死んだよな…。

にしても僕も他の女子や頭のおかしい奴みたい勘違いしてしまつたのだろうか。恥ずかしい…。

偶然目が合った後特有の愛想笑いにしてはすごく嬉しいような笑顔。なぜあんな笑顔を自分に向けられるなんか分からない。

…うん、きつと僕じゃない。

「宇川<sup>うかわ</sup> 翠<sup>すい</sup>です。よろしくお願いします」

透き通った鈴を転がすような綺麗な声が響き渡った。でも少し低いその声が中性的な外見の彼も男なんだと改めて分からせる。僕がそんなことを考えている間にもこちらに微笑みかけているのもまだ気のせいだろうか…。先ほどの羞恥心に駆られてその瞳から逃れるように僕は目を逸らした。

☆ ☆ ☆

帰りのホームルームの後、案の定帰りの準備をする転校生の周りにはクラス中の奴らが取り囲んで彼を離さなかった。…朝からずっとこんな感じだ。可哀想に。

だが、やはり今日一日で何度も宇川 翠と目が合う気がするがそれは気のせいだと自分に言い聞かせていた。

「おいスツゲエ、騒ぎだな」

あいつは義理の兄弟の谷川<sup>たにかわみつき</sup> 満生、僕の大敵だ。義理の兄弟と言っても僕の父と満生の母が結婚する予定なだけで、まだ苗字は違う。でも父さんが海外の長期出張から帰ればすぐにでも結婚することが決まっているため、今は最悪な事に一緒に僕の家で暮らしているのだ。

「何があつたのか教えろよ隠キヤくん」

そう言つて無差別に選んだ大人しい生徒の髪を鷲掴みにした。



あーあ…またやってるよ。

性格は最悪だが顔だけは整っているせいで学校では人気者で権力者だった。根っからのいじめっ子で学校中にパシリがいる。その中でも義兄の僕に対しては一番当たりが強い。クラスは違うが僕のクラスまでやってきて自分の掃除当番を変わらせたり仲間に僕への嫌がらせを強要していた。

だがその凶暴な性格と自分勝手な行動のせいで陰では結構敵がいるのを僕は知っている。

「おい、聞いてんのか?!このグズ!」

満生の傲慢な態度と暴力に等しいスキンシップのせいでうまく答えられなかった生徒の頭をいつものようにパシッと叩いて胸ぐら掴んでいる。

すると、「おい、三影！」

：ああ、やつぱり話しかけてきたか。

『三影<sup>みかげ</sup> 月<sup>つき</sup>』

これが僕の名前だ。

「高校生になってもぼっちの三影 月くーん」

家では名前と呼ばれるのに学校では苗字でよぶ疑問を前に投げかけた。

すると、お前みたいな陰キヤと仲が近いなんて周りに思われたくないからと見下したように笑っていた。

だったら話しかけなければいいじゃないか…。

そう思ったが、いちいち相手にしていたらめんどくさそうなので知らんぷりしておいた。

満生は何かにつけて喧嘩を売って来る。子供の頃からの知り合いだがその時から僕の事が気に食わないらしい。

そのうえ、頭に血が上りやすく言い返すと殴られ、嫌がらせが学校でも家でも酷くなる。無視をしても罵倒されめんどくさいのだ。だがあえてたまに無視をする。これは僕なりの些細な抵抗なのだ。

「何だよ、このクラスの騒ぎは？」

「…転校生だよ」

「へーこんな時期に転校ね…。髪の色変わってるじゃん。海外からか？うーわっ、こっち見た。なにめちゃうくちや美形じゃん。目の色まですげー」

「…そうだね」

僕の席までやって来た満生とそんな話していると、転校生の方から痛いほどに視線を感じる気がしてそちらの方へ目をやろうとした。が、それを満生から手首を強く掴まれ阻止される。

「なに、あの転校生狙ってんの？」

…は？狙うってなんだよ。あんな転校初日で大人気者と友達になりたいなんてそんな身の程知らずじゃない。満生は僕が他の奴と親しくなると不機嫌になった。僕に話かける奴らを時にはそいつをいじめたり、時には嘘の噂を吹き込み僕を徹底的に孤立させた。

そして僕が痛がったり悲しんでいる顔を見ると満生はすごく喜んだ。

ああ、こんなに憎らしい奴と話したくないな。

そんな事を考えていると：

「無視すんじゃないよ！」

案の定怒鳴られる。耳がうるさくてキツと睨んでやった。

「：なあお前っ」

手首を血が止まりそうなほどギュツと掴まれ満生がまた何か言いかけようとした時：

ガタンッ。

誰かが勢いよく席を立ち上がった。

その音がした方を見ると宇川 翠がこちらを凝視している。

ん？ 僕の近くに知り合いでもいた…？

彼は自分に話しかけようとする人達に気づいていないのか見向きもせず、迷わず僕の側に立った。

そして、満生から僕の手を奪い返すように両手で優しく包み込んだ。  
だ。

そんな様子にクラス全員がこちらに注目しているのが分かる。満生もさすがに驚いた顔をして固まっている。

何事だと生徒たちが色々な考察が頭をよぎらせる中僕は動揺する気持ちをもて悟られないよう顔の筋肉をキュッと引き締める。

「えつと、何か…？」

転校生は僕のことを観察するようにじっと見つめてくる。

「え…、なに」

手を握られながら見つめられ、もうそろそろ顔が赤くなってしまうそうだった。

「やっぱり僕のこと覚えてないんだね」

「へ…？」

なんのことだ？

僕はこの転校生には会ったことがない。もし会ったことがあれば忘れるはずはないだろう。こんな美形。

混乱する頭を抑えてながら次の彼の出方を伺った。

すると彼は、僕の机に両手を手を置き、宝石のような目でまっすぐ僕をとらえると一言：

「・・・僕と友達になつてくれない？」

やっぱり女性と間違えてもおかしくないほど綺麗な笑顔でそう訪ねてきたのだ。

それもあり美形の。

「...」

僕はさらに混乱した。



『は…？』

否、周りの生徒の方が混乱していたのかもしれない。

…どうして僕なんだ？

呆けていると満生が横から割り込むように口を挟んだ。

「転校生くん…だっけ？優しいんだな。三影がひとりぼっちで可哀想だから声かけてあげたんだろ？」

いつもみたいに人気者モードの満生が猫を被る。でも何処か焦った様子だった。

まあそうだろう。

学年…いや、学校一の美形から声をかけられるのが自分じゃなく先ほどまでぼっちだと馬鹿にしていた僕に話しかけられたのだから。

「可哀想？僕はただ、三影さんと仲良くなりたいたいと思ったただだよ。」

笑顔で宇川 翠がそう答える。

満生は少し考え込んだ後、何か企んだのか歪んだ笑顔で続けた。

「でもあまりお勧めしないな。」

三影ってめちやくちや惚れっぽくて友達の彼女寝取っちゃって中学でもずっと避けられてたんだ。

宇川くんには彼女出来た時に俺心配になるよ。

それに一人のほうが好きらしいから、気にしないでオレと友達にならない？」

前半の部分を周りに聞こえるように大きな声で喋り出した。  
：嫌われてたのは満生がそういう風に仕向けたからだろ。

嘘の噂まで流して。

それに僕……童貞だし……。

性格がひねくれてるのは否定できないけど。

確かに僕よりかは満生と一緒にいた方が宇川 翠にとってはいいのかもしれない。

ああ見えても満生は僕と僕に関わろうとした奴に特に意地悪なだけで自分と親しい奴の前ではいい奴を演じられるので一部で人望は確かにあつたのだ。

だから彼の意味の分からない嘘もみんな信じていた。

「ふふつ余計なご心配ありがとう。でも僕は三影くん友達になりたいんだ」

笑顔だが、心なしか声は強みを含んで聞こえた。

「いや、だからそいつは性格悪：「ちょっと黙っててくれない？」

シン…と教室が静まり返った。

先ほどまでクラスメイト達に終始笑顔で対応していた彼が満生の話など興味ないと遮るように言ったのだ。

僕の位置からは顔が見えなかったが満生は宇川の顔を見ると少し怯えたように僕達から離れて行つた。あの満生が素直に離れていくなんて…。

…何が起こつたのか分からなかった。

「ねえ三影くん、だめ…かな？」

宇川 翠が少し遠慮がちに耳元でもう一度僕に聞いてくる。

：ほんとにどうして僕なんだ？

満生に便乗するわけじゃないけど、もつと自分に釣り合う奴らなんてそこらへんにいるじゃないか。

こんな隅でメガネかけて本読んでるような陰気なやつと友達になりたいなんてやつ今までいなかったぞ：

もしかして、元々大人しい方で自分のルックスを自覚していないのか？

そんなことを考えていると

返事がない事に不安を覚えたのだろう。

宇川 翠は徐々に泣きそうな顔になっていく。

：やばい。

やばいぞこの状況は。

何でかって：周りの目が痛すぎる。

僕に断らせないために狙ってやつてるわけじゃ無いだろうな…？  
ここで僕みたいな陰キャがもちろん！なんて言ったら彼を友達に  
引き入れようとしていたクラスの奴らから身の程を考えろとバツシ  
ングを受けるに決まってる。

思い悩んでいると教室に入って来た美術の先生から名前を呼ばれ  
た。

「ご、ごめんね。また後で…」

そういうときつきまで儚く悲しげなだった宇川 空いの顔がパツ  
と切り替わりいいよ、また後でねと余裕げにニコツと僕に笑顔を向  
けた。

助かった…。そう思いながら教室を出るが背中に刺さる視線がす

ごく痛かった。

放課後、僕は美術の授業後のクラス別のそうじ当番が終わった後、教室に戻るとあんなに騒がしかった教室にはもう誰もいなかった。満生と他の奴らが僕にぜんぶ押し付けてきたせいでずいぶん遅くなつてしまったのだ。

「見つけた」

声の方へ振り向くと少し息が上がっている様子の宇川 翠がいた。

え？ 宇川 翠……まだ残つてたのか？

彼は一人だった。あの状況でよく他の奴を巻いたなと感心しながら彼を見ると……急にぎゅつと抱きしめられた。

「…月くん、すごく会いたかった」

???

何やってんだ、この人。

「ああ、ごめんね…ふふ。そんな驚いた顔しなくても」

あんぐり口を開けている僕の顔を覗いて再び僕を抱きしめ直す彼は幸せそうに笑った。

「えっと…誰かと勘違いしてない？」

「ねえ、僕のこと本当におぼえてない…？」

話が噛み合わないぞ。そもそも人違いだ。



「絶対に会った事ないと思うよ」

彼と会った事があるなら忘れるはずがない。そういう思いから自信を持って言ってやった。

「そう、じゃあ僕の勘違いかもしれないね」

少し声のトーンが低くなった気がするが未だ僕のことを離してくれなくてむしろ先ほどよりも力が強くなった彼に少し違和感を持ちつつ、華奢なのに僕より少し背高いんだなんて変な事を考えていた。

それに気づいて慌てて彼の腕から逃れた。

「あ、えつと宇川くん……だよね」

「翠って呼んで  
にこつ。」

：うわ、僕が女だったらこの笑顔にやられていたかもしれない。  
いや、今日見ただけでも男でもやられてた奴が何人かいた気がするな…。

少しドキッとしたが僕は生憎、男に興味を持つタイプではないし、  
好きになった事はもちろんない。

女の人ですら好きになつたことがないのだから。

そんな事考えてると彼は僕の目を見て観察するような眼差しで見  
ていた。

あ、自己紹介してくれたのだからこちらも返さないと失礼か…。

「…えつと、僕は…」

こちらにも名乗るべきだと思つて口を開くがクラスに馴染めていない僕にとつてはこんなふうにはクラスメイトに話しかけられる事がないため、変に緊張してしまつて上手く言葉にできない

「三影 月くんだね。初めて見たときから一番最初の友達は何が  
いいなつて思つたんだ。これからボクと仲良くしてくれる？」

美しく笑う彼の口からこんなふうによしく言われたらだれもが嬉しくなつてしまふんじゃないか。

正直どう見たつてスクールカーストとかいうやつの中で最下位に居座つてそんな僕なんかには話しかけてくるなんて、転校生初日で余程不安なのかと思つた。もしかして、僕と同じでいじめられてたとか？

：いや、こんな天使みたいな見た目してる人いじめるやついるか？

そんなことするやつは天からバチが当たるのではないかと逆に心配になる。

一目見て彼に対して害そうとする心は湧かないだろう。それほど宇川の容姿は美しかった。

容姿の良い転校生は性格に関わらず人気者になるなんてよくある事だ。けどそれは大抵一時期なもので、しばらく経つと慣れるし性格もある程度面白くないとみんな離れていってしまう。

でも宇川はクラスの人気者になる事なんて今日の様子を見ただけですぐわかる。

今日もクラスの奴らに終始笑顔で接していて彼は誰とでもすぐ仲良くなれるタイプだ。

僕なんかがそばに居なくても自然に人が集まって、宇川 翠の取

り合いになる未来が見える。そして僕と関わる機会も減るだろうな…。

「三影くん…？」

かと言ってこんな哀しそうな顔してるのに断ったりしたら可哀想だ。

どちらにせよ、満生のせいで目立たず静かに学園生活を送りたいという僕の希望は儚く散ったのだ。

「やつぱりだめ…かな。急にこんな事言われても困るよね」

ああ…なんだかめっちゃ可哀想になってきた。

少し悩んだ挙句僕はこれからしばらくはクラスメイトの視線が痛

いだろうと確信しながらも受け入れる事にした。

それに笑いかけてくれたのも話しかけてくれたのも純粹に嬉しかった。

「…いいよ、友達。僕なんかでよかったら」

「…っ！」

友達ができるなんて満生から嫌がらせを受け始める前の小学校以来初めてだ。

こんな事慣れなくて少しこそばゆくて顔が赤くなっていたかもしれない。

宇川 翠は少し顔を赤らめ驚いた表情をした気がしたが、その後すぐにパアッと花が咲くように笑う。

「ほんと?! すごく嬉しいな…ありがとう！」

「こちらこそ…」

彼ならず僕なんかよりもっと良い友達をすぐ見つけれらるだろう。

その時はそんな事を思っていた。

「月くん！ 今日僕の家来るでしょ？」

「うん、いいよ」

宇川と友達になったあの日から半年が過ぎ、

宇川は僕の事を『月くん』

僕は宇川の事は苗字で呼ぶようになった。

下の名前で良いよと何度か言われた事もあつたがどこか照れ臭くてその場はいつも誤魔化し苗字のままに呼んでいる。

宇川と満生の件があつてからクラスメイトたちはどこで怒るのか分からなくて掴みどころのない宇川に少し怖がつている様子だったが、普段は温厚で物腰も柔らかくさすがと言うくらい彼はすぐに人氣者になった。

たまにあの時の宇川は別人だったのではないかと本当に思つてしまうくらいだ。

ちなみに僕は相変わらず友達には宇川だけだが、不思議と前のように嫌がらせされることはなかった。

無視させることもなければ物を隠される事もない。

中学の頃に比べればすごく、快適だった。



：満生は相変わらずだが、宇川の前で僕に話しかけることは無くなった。

といつても宇川はほぼ常に僕の隣に居るので、学校では満生と会話する事もなくなつたが。

宇川がどうして僕と友達になりたかつたのかいまだに分からない。学校の人気者と陰キャ。

対照的な僕達だが、意外にも僕らには似ているところがある。それは夜空眺めるのが好きだと言う点だ。

夜空に星が輝いているのを見ると辛い事があつても何も考えなくて済む。

天文学に詳しいのかと言われたらそんな事はないがただなにも考えずしゃべらずばーっと眺めるのが好き。そんな感じだ。

満生からは暗いだの隠キャだの散々バカにされてきた。

だからまさか高校で同じ趣味の友達が出来るとは思っていなかった。

しかも、宇川は僕よりも星に詳しく天体望遠鏡まであるのだ。

宇川の家は海が見える丘の上にあり、星と海どちらも綺麗に見える。

そのうえ、屋根裏部屋には星を見るために作ったという大きな窓があり、星を見るには最高の場所だった。

初めて家に呼ばれた時は緊張したがそれも最初だけで今では家よりも星川の家に戻りたいぐらいだった。

僕は星を見始めると時間を忘れてしまうため、宇川の提案で、家に行く時は泊めさせてもらおう事になったのだ。

「どうせ僕の家に行くんだから月くん家まで寄り道して行こうか

な」

「…いや」

僕は少し焦る。

宇川はこうやってたまに僕の家に来たがるのだ。

出来れば宇川には家に来てほしくない。

…僕の家は満生もいるし少し面倒だから。

「すぐに行くから宇川は家で待ってて」

下手くそであろう僕なりの笑顔を宇川に向ける。

「…うん分かった！待ってるね」

楽しみにしてる！と手を振る彼を見送って僕は家へと足を進めた。

「…ただいま」

「おかえり月。お父さんに電話してくれた？」

帰ってきて早々、女性が僕に尋ねる。

「忘れてました」

「もう!!早くしてって言ってるじゃない?!アンタの教育費バカになら無いんだから。」

「…分かりました」

彼女は谷川<sup>たにかわ</sup>美代子<sup>みよこ</sup>僕の父さんの恋人でもうすぐ僕の母親となる

人だ。

ちなみに僕を産んだ母親は父さんとは離婚している。離婚したのは二、三歳の頃らしいので写真で顔を見たことはあるが実際に顔は覚えていない。

その後父さんの方に引き取られたが、働きながらの子育ては難し  
いらしく父方の祖父母の家でお世話になっていた。

難しい家庭だと言われることもあったが、普通に幸せだった。

祖父母が亡くなって父に引き取られる中学一年生までは。

父は海外出張などで常に忙しく、あまり家にいなかった代わりに  
新しく家政婦を雇うことになった。

それが彼女だ。最初こそ住み込みではなかったが、父の恋人にな  
った頃から満生と一緒に家に住むようになった。

それからしばらくして結婚の知らせを彼女の口から聞いた時は絶  
望した。

父の前では優しいけれど、父がいないと性格が変わる。：まあ金目当ての女なんてそんなもんだ。

かといって、多忙な日々を送っている父に言いつける気にもなれなかったし、父とは数年会っていない、言う機会もなかった。

うちに住むようになったきつかけは家にいられない父の代わりに僕の面倒を見てくれる：らしい。

実際彼女は家の事は僕に押し付けてばっかりでろくに料理も掃除もしない。

：ほぼ僕が家事をしているのでどちらかと言えばこちらが面倒を見てる方だと思う。

教育費の話も父によると毎月十分な額を振り込んでくれているらしいが、彼女によると足りないようだ。

おそらく、あのブランド物の大半は僕のエデュケーションで買った物なのだ

ろう。

ブランド物で埋め尽くされたクローゼットを横目で見ながら彼女と満生の夕ご飯の支度と掃除をする。

そして支度が終わるとそそくさと宇川の家に行く準備をし始めた。満生が帰ってくる前に家を出ないとめんどくさいからだ。

「どこか行くの？」

「友達の家に泊まってきます」

「は？明日学校休みでしょ？休みの日くらい家の事くらいしなさいよ」

「…明日帰ってきたらしますね」

「ふん、ほんと子どもは氣樂で良いわよね。バイトくらいして稼ぎをこつちに回すぐらいしなさいよ」

そうソファで横になりケータイをいじりながら彼女は言う。

：どっちがだよ、バーカ。

心の中で悪態を突くと黙って家を出た。

宇川の家に向かおうと家を出てドアを閉める。

「おい、月！」

名前を呼ばれたので振り返るとそこには走ってきたのか息を切らす満生が居た。

「ちよつと着いてこい！」



「…僕、今から用事あるんだけど」

そういう僕の手を掴みながら近くの土手下のトンネルまで強引に連れて行く。

ここはこの時間誰も来ないし見えないため、よく満生に嫌がらせされる時に連れてこられていた場所だ。

「…っ痛いんだけど、なんなの？」

「お前：最近調子に乗ってるよな？俺のこと眼中に無いみたいな態度取りやがって」

「…はあ？満生が僕と同類だと思われたくないから関わらない方がいいって言ったんでしょ」

そういうと満生は顔を真っ赤にして怒鳴った

「……うるさい！！宇川とかいうやつと友達になれたからって調子に乗んな！！」

満生は捲し立てるように続ける。

「一番最初に声かけたのがお前だから同情して離れられないでいるだけなんだよ！」

「……」

確かに宇川は優しいやつだ。他にも仲がいい友達が出来てもぼっちの僕のことを心配で離れないでいてくれるだろう。

こんなことを考えている僕の顔をみて少しニヤッと満生は満足そうに顔を歪めた。

「…もういい加減解放してやれよ、お前みたいな陰気くさいやつに捕まったら宇川くんが可哀想だろ？」

説得するように僕に話しかける満生に腹が立った。

「…満生には僕が誰と仲良くなろうと関係ないだろ」

そういうと何か逆鱗に触れたようで満生の顔がさらに赤くなる。

「…っんだと?!」

僕のか細い手首を掴むと怒りをぶつけるように強く上に縛り上げ

た。

「…っ。」

アザになるんじゃないかと思うほど強く。

「ははっ。お前は今までどおり一人で居ろよ。誰とも関わるな」

服の中を手を入れられ、弄られて胸をつねられる。

「…っ！痛いやめろ！」

僕の肌を強くつねりながら満生は話を続ける。

「…俺がなんのためにお前を孤立させたのか知りたいか？」

「お前が苦しむ顔見ると興奮すんだよ」

耳元でそう言う僕が掛けていた眼鏡を片方の手で外すと長い前髪と眼鏡で隠れていた僕の顔を数秒見つめた後、満生が顔を近づいてくる。

「あぁっ、その舌噛み切つてやりてー♡」

：？！何やろうとしてんだこいつ。

僕は置かれた状況と今から満生が何をしようとしているかなんて分からなかった。

満生の顔が僕の顔に重なろうとしたその時。

「…なにしてるの？」

聴き慣れた透き通った綺麗な声が聞こえてきた。

「っ！う、宇川……」

宇川がゆつくりこちらに近づいてくる。

満生に鋭い視線を向けながら

「ねえ、今何しようとしてたの？」

完璧な笑顔を僕達に向ける。

だが、その目は笑っていない。

この宇川は満生から僕を庇ってくれたときの……あの時の宇川だ。いや、もしかするとそれ以上に怖いかもしれない。

僕と満生は金縛りにあつたように動けなかった。

「いま 月くんに 何しようとしてたの？」

なかなか答えない満生に苛立ったのか強い口調で聞き直す。

「いや…それは」

「もういいや、やつぱり聞きたくない」

お前の声など聞きたくないと満生の声を遮り、

「それよりも早く消えて？」

美しい女性が男性をたぶらかすように妖麗に少し首を傾げて言った。

そしてボソツと勝にしか聞こえないよう耳元で

「また月くんに何かしようとしたら殺すから」

無垢な子どもの様に後ろで手を組み、

ニコツと美しくも黒い笑顔を満生に向けた。

「…ひっ！」

声にならないおぞましい恐怖心を植え付けられた満生は腰を抜かしながらも走って逃げて行った。

「月くん！大丈夫だった…？」

先程の黒い宇川は何処へ行ったのかいつもの優しい宇川へと戻る。



何も状況が分かってない僕は

：なにがしたかったんだあいつ。

シャツのボタンもいつのまにか引きちぎられたのか足元に落ちていた。

先ほどつねられた胸がまだヒリヒリしている。

満生はたまに意味のわからない事を発言したり、やろうとするのだ。

今回もそれと同じだと思った。

だから僕を心配する言葉に反応できずただ、

困惑と呆れた表情で満生の背中を見送るだけしか出来なかった。

「：ああ、もう。バカだな月くんは。

この後 どうしてやろうかな」

隠しきれてない宇川の嫉妬心にまみれた黒い表情に気づけずに：。

